

第4回 薬の副作用 この薬、副作用はありますか？

薬を処方すると「副作用はありますか」とよく尋ねられます。薬を飲むことになった時、一番気がかりなのは、効き目よりむしろ副作用かも知れません。結論から言うと、副作用の無い薬はありません。なぜなら、どんな薬でも、多すぎると毒になるからです。もちろん場合によっては、飲み過ぎなくても副作用は現れます。

「副作用」とは、主作用(一番求めている効果)に対する言葉で、必ずしも体に有害な作用とは限りません。「望ましい副作用」というのも無いわけではありません。しかしほとんどの場合、副作用は好ましくない作用です。体に害をもたらす作用であることを明確に示すために「有害反応」や「毒性」という言葉もありますが、ここではより一般的な「副作用」で通しましょう。

まず、どんな薬にもある副作用は、過剰投与によるものです。これは主作用の延長線上のこともあれば、少量では現れにくい作用が現れることもあります。

前者の例としては、糖尿病治療薬を挙げましょう。インスリンやスルホニルウレア系の薬剤は血糖値を下げるのが主作用ですが、過剰になると下げすぎて低血糖という重大な副作用を引き起こします。後者の例としては、解熱鎮痛薬(アスピリンなど)を飲み過ぎたら胃が荒れることを思い出していただければと思います。

薬の濃度が治療域内であれば、このタイプの副作用の多くは防ぐことができます。もっとも、ふつうは血中濃度を測るまでもなく、通常の診察や検査で副作用が現れる兆候を監視していれば過剰投与は防げます。

ただし、たとえ一つ一つの薬としては過剰投与でなくても、複数の薬を併用すると相互作用を起こして、薬の作用が強くなりすぎる場合があります。これについては後日改めて話します。

一方、アレルギー体質の人では、薬の投与量とはあまり関係なく副作用が現れます。いわゆる薬物アレルギーです。

ペニシリン系抗生物質などは、アナフィラキシーと呼ばれる急性アレルギー反応を起こすことがあります。かゆみやじんましんで済む場合もありますが、のどが腫れて呼吸困難になり、血圧が下がって急性循環不全(ショック状態)に陥ることもあり、緊急治療を要します。解熱鎮痛薬や検査で使う造影剤でも、類似の状態が起こることがあります。

薬による皮膚の発疹(薬疹)の多くはアレルギーが関係しているといわれます。皮膚粘膜眼症候群(スティーブンス・ジョンソン症候群)と中毒性表皮壊死症(ライエル症候群)は最も重い薬疹で、生命を脅かすこともあるため早期発見が重要です。解熱鎮痛薬、抗てんかん薬、抗菌薬、高尿酸血症治療薬などでまれに起こります。

薬を飲んだ後、熱が出たり、皮膚が赤くなったり水ぶくれができたり、唇や口の中が荒れて痛んだり、目が充血したりする場合は、直ちに薬を中止して医師の診察を受けて下さい。